

ずっと「おじちゃんせんせい」 小林一茂 様

(下記参照)

後日談として、各紙の上司より取材記事を誉められたとのこと。

▲教育関係者向け雑誌「この本だいすき」(代表 小松崎 進様)に掲載された記事を一部抜粋して紹介します。

・保育士とか経営者とか、そういう立場の方では無く、人生の晩年を何か人の役立つことをしたいと考え、知り合いの保育園に勤め、花壇を作り、四季の花々を子ども達と共に楽しみ、野菜畑を作り、給食の食材を提供するなど、子ども達の成長をそつと応援し、コツコツと静かに作業をしている方でした。ところが、その方の側には、いつの間にか話を聞いてほしい父母や祖母や卒園生徒達が集まり、一緒に作業をしながら、悩みや苦しみを語つて行くようになつたといいます。

そしておじちゃんせんせいが休憩で座ると、その膝の上には、いつも絵本を持った子ども達が先を競うように集まつて来ました。子ども達にとって、おじちゃんせんせいの温もりは大きな大きな宝物だつた」とを知りました。

せんせいは平成二十二年の七月に末期の癌で他界されましたが、その遺影の前には、一年たつた今でも園児からの野の花のプレゼント、卒園生や父母達が休みを利用して語りかけて行く姿が見られるといいます。

ずっと「おじちゃんせんせい」

江津市都野津町の作家村尾靖子さん(68)が、埼玉県の保育園で「おじちゃん」と慕われた男性の園児たちの交流を元妻話を基にした絵本「おじちゃんせんせいだいすき」(今人舎)を出版した。

園児と田務員の交流、絵本に

男性は、村尾さんの講演を通して

交流がある保育園「行田子羊チャイ

ルドセンター」(行田市)の田務員

だった松本慶重さん。昨年7月、病

気で70歳で亡くなまでの遊具づくり

や庭木の植切り、給食の手伝い、園

児たちの写真撮影、泣きやまない子

をおんぶしての散歩など、何でも器

用に対応した。松本さんがあぐらを

かくど、園児たちは競うようにひざ

を取り合つた。

村尾さんは、そんな心温まる触れ

合いの数々を、松本さんの姉で保育

園を運営する社会福祉法人「ひつ

じ会」理事の市川益子さん(85)から

江津市都野津町の作家村尾靖子さん(68)が、埼玉県の保育園で「おじちゃん」と慕われた男性の園児たちの交流を元妻話を基にした絵本「おじちゃんせんせいだいすき」(今人舎)を出版した。

死後に教えてもらった。心を打たれて出版社勤めの知人に相談すると、絵本作りが決まった。

絵本は32点。「おかあさんが恋しくて泣く子どもをおんぶし、「がまんせんでええぞ」と優しく見守る。運動会や農作業と一緒に取り組み、園児たちと仲良くなっていく。だがあ

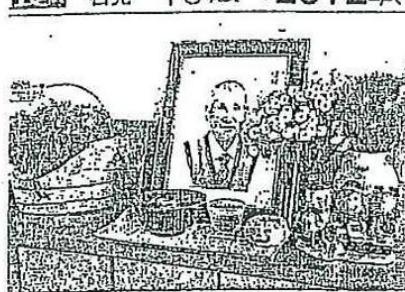
る日、元気がなくなつたおじちゃんせんせいは、いなかのうちに帰つていく」。イラストレーターの山本祐司さんが優しいタッチで描いた。

松本さんは晩年、体調がすぐれな

せんせいは、いなかのうちに帰つて

いく。イラストレーターの山本

祐司さんが優しいタッチで描いた。



保育園玄関の松本儀重さんの遺影の周りには、卒園児らの花束や手紙が置かれている=埼玉県行田市若小玉

卒園生の手紙や花束、遺影に



絵本を出版した村尾靖子さん=江津市都野津町